



主張

「覚悟」をもって

井上光司

今年四月、文部科学大臣が中央教育審議会に対して初等中等教育制度の総合的な見直しを諮問した。その内容から、教育制度の根幹である教職員配置、教育課程、免許制度を一体的に見直し、約七〇年ぶりの抜本的な制度改革の必要性を考えていることが読み取れる。高い成果をあげてきた我が国の学校教育が崩壊してしまうのではないかと危機感をもち、教育水準を持続可能にするための文部科学省の本気度がうかがえる。今後の教育行政に期待するとともに、今こそ、校長は学校経営の責任者として学校教育の質の向上を図るために、新たな時代に向けた学校経営の改善に「覚悟」をもって取り組まなければならない。

学校運営の改善と発展を目指すための取組として、平成十九年に学校教育法の改正により規定された学校評価が一〇年以上実施されてきた。学校評価の実施手法として、目標や計画に照らして、その達成状況や取組の適切さについて行う自己評価、自己評価の結果について評価を行う学校関係者評価、外部の専門家による専門的な視点から行う第三者評価の三つの形態に整理されている。中でも自己評価が一番重要であると考えている。生徒への指導・支援に責任を負い、教育実践の成果を高めようとする教職員は自らの実践についての達成状況や改善点についての情報や知識を必要としている。自己評価を機能させるた



めには、当該学校で働く非常勤職員を含めた全ての教職員が参加し、常に目標との一体化を考えることである。評価は、目標に対する達成状況を見るものであるから、校長が示す学校経営方針や重点目標を全教職員が共通理解して、当事者意識を高めることが必要不可欠である。児童や保護者によるアンケート結果や各種データの数値のみに翻弄されることなく、学校教育の質を高め、最大限に教育効果をあげようとしている教職員を励まし、チームとして組織的な学校経営を行うことが結果的には自己評価を生かすことにつながる。教職員の思いが反映され、全教職員が主体的に評価に関わる体制づくりが鍵となる。

ある先輩校長から、「評価は時間をかけること。一度に長時間かけて考え続けるのではなく、数回に分けて何回も考える。評価は、時によって判断が異なる。判断に迷う場合は、時間が経つと自ずと整理されてくる。時間をかけ、日数をかけ、悩み、成熟させなさい。また、評価は問題点を見つげるだけではない。先生方の真摯な取組に対して成熟感や達成感が味わえない評価では寂しい。そのためには成果の確認にも十分に時間をかけなさい。」と教えられたことを今なお実践している。

教育課程であれ、生徒指導であれ、全ての教育活動には校長の意図がある。校長は学校経営の責任者としてどのように関わり、その実現のためいかなる手立てを講じたか。また、どのように教職員、保護者に理解を求めたか。学校経営の視点、教職員の資質向上の視点、働き方改革の視点からプロセスの工夫や改善策の構築など、校長としての指導性を十分に発揮するとともに、学校評価を含め、これまで培ってきた様々な学校経営に係るノウハウを確実に伝授することも校長の果たすべき役割の一つである。

(全日中副会長・高松市立桜町中学校長)